

# 日中大学生の自我同一性地位に関する比較研究 —文化的自己観からのアプローチから—

学校教育専攻  
教育臨床コース  
許 英 美

指導教官 田中雄三

## 1. 問題と目的

人間が人間として成熟していくために取り組まなければならない課題として、Erikson, E.H (1959) はアイデンティティという概念を提唱した。その後、今までアイデンティティについては数多くの研究がなされてきた。中でも 1990 年前後より“自己認識方式”の視点から、アイデンティティ形成に関する研究がなされるようになってきた。だが、この分野の実証研究はまだ少ないし、国際化が進んでいる現在、文化の多様性を理解するためにも、文化的自己認識方式と自我同一性との研究をもう一步進める必要があると思われる。

本研究は、日中大学生に対して自我同一性地位による自我同一性の達成の状況を調査し、さらに日中大学生の自我同一性地位と文化的自己観の関係について検討する。

## 2. 対象と方法

本研究では日本 H 大学教育学部の学部生 254 名（男子 122 名、女子 132 名）と、中国の B 大学教育学部の学部生 276 名（男子 93 名、女子 183 名）を調査対象とし、日本人に対しては 2003 年 1 月に調査を実施し、中国人に対しては 2003 年 3 月に調査を実施した。日本人学生への質問紙は加藤（1983）の「自我同一性地位尺度」と Singelis(1994)の「相互独立的自己観と相互依存的自己観尺度」を用い、中国人学生への

質問紙はこの二つの尺度を参考に筆者が作成した。

得られたデータをもとに、(1) 自我同一性地位の日中比較、(2) 文化的自己観の日中比較、(3) 自我同一性地位尺度と文化的自己観尺度との関連の日中比較の三つについて分析を行った。

## 3. 結果

(1) 日中自我 同一性地 位比較	<p>①日本人と中国人の自我同一性地位の比較を行った結果、日本人の「同一性達成」(<math>P &lt; 0.01</math>)、「D-M 中間」(<math>P &lt; 0.05</math>)が中国人より有意に多く、中国人の「A-F 中間」(<math>P &lt; 0.01</math>)、「積極的モラトリアム」(<math>P &lt; 0.01</math>)が日本人より有意に多かった。</p> <p>②日本人と中国人の自我同一性地位下位尺度の得点の比較を行った結果、日本人の「過去の危機」(<math>P &lt; 0.001</math>)の得点が中国人より有意に高く、中国人の「将来の自己投入の希求」(<math>P &lt; 0.001</math>)の得点が日本人より有意に高かった。</p>
(2) 日中文化 的自己観 比較	<p>日本人と中国人における文化的自己観の比較を行った結果、日本人の相互依存的自己観の得点は中国人より有意に高く (<math>P &lt; 0.001</math>)、中国人の相互独立的自己観の得点が日本人より有意に高かった (<math>p &lt; 0.001</math>)。</p>

(3) 日中自我同一性地位尺度と文化的自己観尺度との関連	①日本人の自我同一性地位尺度と文化的自己観尺度との関連を見た結果、「同一性達成」の相互独立的自己観の得点が「D-M 中間」( $P < 0.001$ )、「モラトリアム」( $P < 0.05$ )、「同一性拡散」( $P < 0.05$ )より有意に高いことが認められた。「A-F 中間」の相互独立的自己観の得点が「D-M 中間」( $p < 0.10$ )より、「権威受容」の相互独立的自己観の得点が「同一性拡散」( $P < 0.10$ )より有意に高い傾向が認められた。
	②中国人自我同一性地位尺度と文化的自己観尺度との関連を見た結果、「同一性達成」と「権威受容」の相互独立的自己観の得点が「同一性拡散」より有意に高い傾向が認められた ( $P < 0.10$ )。「A-F 中間」の相互独立的自己観の得点が「同一性拡散」より有意に高かった ( $P < 0.05$ )。「同一性達成」の相互依存的自己観の得点が「同一性拡散」より有意に高い傾向が認められた ( $P < 0.10$ )。

#### 4. 考察

日中自我同一性地位を比較した結果、中国人の「A-F 中間」が日本人より有意に多かった。ということは、中程度の「過去の危機」を経験した中国人が日本人より多いということであり、これは中国の教育と社会特徴を端的に表したと思う。一人っ子政策とともに、中国の親たちは子供に大きな望みを託すようになり、子供を自分が理想とする枠にはめようとするのではないか。これは、子供の自我同一性に影響を与えたと思う。

日中とも「積極的モラトリアム」、「D-M 中間」、「同一性拡散」地位の人が合わせて過半数を超えていた。これは現在日本のフリーターと中国の「自由採業者」(正式な仕事でなく、自分が好きな仕事を一時的にすること)が増え続けている原因ではなから

うか。すなわち、アイデンティティを達成するまでの長い準備期間、モラトリアムが許されていることが、アイデンティティ達成が遅れる状態が作られていることと関連があると思われる。

日中文化的自己観を比較した結果、日本人の相互依存性が中国人より有意に高く、中国人の相互独立性が日本人より有意に高かった。ということは、中国人は日本人に比べて集団主義的ではないといえるのではないか。

日中自我同一性地位尺度と文化的自己観尺度との関連を見た結果、日本人の場合、大体相互独立性が高い人であるほど、同一性達成地位に違い人であった。従前に定められていた役割や道を受身的に受け入れる早期完了型(龔(1990)によれば、予定アイデンティティ)でなく、「個」としての自分を強調する人が多くなったことを表したと思う。中国人の自我同一性地位尺度と文化的自己観尺度との間には、はっきりしたある傾向の持つ関連は認められなかった。これは中国人の自我の特徴と関係あると思う。中国人は「面子(メェンツ、中国語では顔を意味する)」、「関係」、「人情」などを大事にするし、こういう社会文化のため、中国人の相互独立性は強い相互依存性を伴っている。中国人はまた強い「自己中心的」価値観も持っている。このようなことから、相互独立性と相互依存性によって中国人の自己概念の特徴を現すのは困難なのではないかと思う。

#### 5. 結語

本研究では、文化的自己観のアプローチから日中大学生の自我同一性地位の比較を行った。

しかし、今回用いた中国人に対する文化的自己観の尺度は、信頼性や妥当性の面で、疑問が残る。今後は質問紙の更なる検討、特に中国人の文化的自己観尺度についてはさらなる検討が必要であると思う。